

「報恩講」のこと

わたしたちのお寺「勝林寺」では、毎年十一月十四日・十五日が「報恩講」です。お寺の「報恩講」がつとまつてから以後、あくる年の二三月ごろまでにかけて、それぞれの村、それぞれの家庭で漏れなく「報恩講」がつとまります。

このように、寺でも村でも家庭でも、一年に一度かならずおつとめする「報恩講」は、いわば淨土真宗の標札のような行事です。これがなければ淨土真宗とはいえないといつていいほどの法要です。

ですから淨土真宗の家では、昔から、ほかの法事や何かよりもいねいに「報恩講」をおつとめしてきたのです。たとえば、お仏壇には、「お華足」という形式でお餅をおそなえしますし、ローソクもとのときは必ず朱(赤)ローソクをともします。平素とはちがつてこの時は「五具足」(ローソク立一本、花びん二つ、香炉一つ)というかさりつけをします。打敷をかけるのはもちろんです。

「しまでも、この「報恩講」の日には、家の子供たちが、それぞれ孫をつれて里帰りに参つてくる家もあります。

こんなに大切におつとめする「報恩講」というのは、いつたいどういふ意味の法要でしょか。

「報恩講」のことばの意味を調べてみますと、「報」は「ムクリル」。「振り向く」ということはからうまれた語といいます。

「恩」は「因」と「心」とからできています。「因」は、人が寝床によつて寝ている姿をうつした字です。ですから「よる」とか「よりどころ」とかもと」とかという意味になります。その字にまた

「心」という字がついているのですから、「恩」という字の意味は、「心をよせる」(愛する)という意味になるといわれています。

次に「講」というのは、「ことば」です。つくづきの「講」は、「組み合わす」ということです。つづきの「講」は、「組み合わす」というと仲間」のことです。「話し合いによつて心を交わせる集会」という意味です。

「私の心のもとの方向に目を振り向けるための話し合いの集り」というのがこの「報恩講」の意味です。

親鸞さまのご命日(ほんとは一月の十六日です)

が、この日はご本山でご命日法要のご正忌がつとまりますから、それ以前にお取り越しということ

でそれ適当な日につとめるのです)をご縁にして、親鸞さまといつしよに、親鸞さまが仰がれ

た、私たちのいのちのよりどころに、目を向くなおらしてもらおうと、おつとめする集りです。

私は平素、目を外に向けてくらしています。

人のことが気になります。物にこだわり欲ぼけにくらしています。

お金を追いかけて生きています。

家のことや子どものことやそんな外側のことばかりにかまけて日々をおくつてしまっています。

かんじんの私は大丈夫でしようか。

いつ何がおこるか知れないこの私のいのちは、ほんとに大丈夫なのでしようか。

生死観がこのいのちは、なんのためにあるのでしょうか。

私のこのいのちは、流に浮ぶうたかたのようにはかなく消えていくつてしまつ、それだけのものでしようか。

親鸞さまは、「生死出づべき道」を求めてくださいました。

「愛欲を超える道」を示してくださいました。

「無量寿」(永遠のいのち)に生きかえるお念

仮のみちを伝えてくださいました。

私たちのいのちのよりどころ。

私のいのちが生きる根拠。

私が死んでも生きかえるいのちのもと。

そのことを、親鸞さまがおすすめくださるお念

説

です。

人のためにつとめる法要ではありません。だからとの法要よりも大切に大切におつとめしてきました。

おおら

して

おおら